

ケアの倫理と公共政策

広井 良典*

抄 録

「ケア」は広義から狭義まで多義的な意味をもつコンセプトである。本稿では、まず「ケア」という問題設定をめぐる議論が近年の日本においてどのように行われてきたかを概観した上で、ケアの倫理について考える視点を、特に日本社会における「社会的孤立」の高さやそこでの関係性の特質にそくしながら示す。続いて「ケアの倫理」をめぐるギリガンの議論などに言及しつつ、ケアについての二つの異なった理解（リベラリズム的な理解とコミュニタリアニズム的な理解）に関する概念整理を行い、その根底にある人間における「関係の二重性」という把握を提起する。さらにこうした原理的考察を踏まえ、「ケアの経済的評価」という視点から、市場経済とケアのかかわりや「生産性」概念の見直しとケアなどを含め、ケア・コミュニティ・自然の関係性の新たな把握に依拠した公共政策のあり方を論じる。

キーワード：ケアの倫理，社会的孤立，政治哲学，ケアの経済的評価，コミュニティ・自然

社会保障研究 2016, vol.1, no.1, pp.22-37.

I 「「ケア」という問題設定」をめぐるここ20年前後の変化

本稿では、「ケアの倫理と公共政策」というテーマについて、一方では社会保障制度や「ケアの経済評価」といった制度・政策的側面を視野に入れつつ、他方では「そもそも人間にとってケアとは何か」といった、ケアに関する原理的ないし思想的次元を重視しながら、幅広い観点から考察を行ってみたい。

内容的な議論に入る前に、「ケア」というテーマをめぐる議論それ自体の状況についてのここ20年前後の変化について、若干の個人的述懐を含むも

のであるが、記すことをお許しいただきたい。

ほかのところでも述べたことがあるが〔広井（2013b）〕、筆者がケアを主題とする最初の本（『ケアを問いなおす』、1997年）を出した当時、介護や看護といった、ケアの個別領域に関する本や論文は一定以上見られたものの、より一般的ないし普遍的な意味で「ケア」そのものについて論じた文献はきわめて限られていた。¹⁾また、2000年に出した『ケア学』という本の末尾に、ケアに関する幅広い視点での文献案内を添えたが、その時点でも「ケア」そのものの意味を正面から主題化した本はなお少なく、一定の領域横断性を意識した10ページほどの文献案内を作成するのに苦心したことを覚えている。

* 京都大学こころの未来研究センター 教授

¹⁾ そうした例外的なものとして、例えば柏木（1978）、メイヤロフ（1987）、川本（1993）など。

ところが、とりわけ2000年代に入り、「ケア」というコンセプトはさまざまな学問分野で活発な議論や探求の対象となり、それに関する文献や研究は飛躍的に増大していった。²⁾

科学史的な視点から見れば、「ケア」というテーマ設定が研究者コミュニティの中で重要かつ有望なものとして認知され、それについて研究を行うことが当該学問分野での業績になるという状況が生まれたと言うこともできる。トマス・クーンのパラダイム論風に言えば、各々の学問分野における、「ケア」を主題とする「通常科学（ノーマル・サイエンス）」の生成である。

一方、先ほど「とりわけ2000年代に入り」という点に言及したが、介護保険法が成立し(1997年)施行されたのが2000年であり、また高齢者介護をめぐる議論自体はいわゆるゴールドプラン（高齢者保健福祉10カ年戦略、1989年策定）前後の時期あるいは1980年代後半から次第に高まりを見せていたので、以上述べたような「ケア」をめぐる研究ないし言説状況は、日本の場合、高齢者介護をめぐる政策展開あるいは社会的現実の変化にかなり“遅れて”進んでいったという点は否定できない。³⁾同時にまた、日本における高齢化のスピードが国際的に見ても非常に急速だったこともあり、「ケア」をめぐる議論が、良くも悪くもいわば“高齢者介護主導”で展開していったことも確かである。

本稿の議論は、以上のようなここ20～30年前後の日本における、「ケア」という問題設定をめぐる状況の変化を視野に収めながら行っていきたいと思う。

ところで以上の議論ともかかわるものとして、ここで簡潔に本稿での「ケア」の意味ないし定義について確認しておこう。「ケア」という言葉ないし概念は、①最も狭義では「介護」ないし「看

護」といった（医療・福祉などの領域に特化した）意味として使われ、②中間的な意味として「世話」、③広義では「配慮、気遣い」という意味がある。⁴⁾そして本稿の以下の議論とも関係するが、さらに広義の用法として、近年では（人と人との、あるいは自然等との）「関係性」とほぼ重なるような意味で「ケア」が使われることも多くなっている〔広井（2005）〕。

ちなみにケアの語源とされるラテン語のcuraは、もともと「憂い、心配、気がかりなこと」といった否定的なニュアンスの言葉であった。そうであるがゆえに「保障」を意味する「security」という英語は、ラテン語のse cura（＝英語ではwithout care）つまり「ケアがないこと＝憂いや心配がないこと」という趣旨に由来しているという興味深い事実がある。そして、そうした否定的なニュアンスであった「ケア」という言葉が、ある時期からよりポジティブな他者とのかかわりを意味するようになったという歴史的経緯自体がさまざまな示唆を含んでいる〔これらにつき広井（1999）、同（2000）〕。

本稿では、個々の文脈に応じて「ケア」を以上のような多様な意味で用いることになるが、基本的なスタンスとして、ケアを当初から狭い意味に限定せず、できるだけその意味の広がりを重視しながら議論を展開していきたい。

II ケアの倫理を考える視点

1 日本社会と「社会的孤立」

「ケアの倫理」というテーマを考える手がかりとして、日本社会における「社会的孤立」という話題をまず考えてみたい。

次のような興味深い資料がある。それはミシガン大学で行われている「世界価値観調査（world

²⁾ 一般向けのシリーズとしてまとまった図書としては、医学書院の「ケアをひらく」シリーズ（2000年～）、岩波書店の『ケア その思想と実践』（全5巻、2008年）などが挙げられる。

³⁾ なお高齢者介護に関しては、北欧における高齢者福祉の充実を論じた一連の印象深い著作がアカデミズムの外部で90年代初頭に出され〔岡本（1990）、大熊（1990）、山井（1991）〕、「介護の社会化」に関する社会的認知や世論に影響を与えた。

⁴⁾ ちなみにハイデガーの『存在と時間』における鍵概念の一つである「Sorge（気遣い）」は英訳ではいみじくも「care」となっている〔広井（1997）〕。

values survey)」という比較的よく知られた国際比較調査のうちの、「社会的孤立度の国際比較」に関するものだ(図1)。

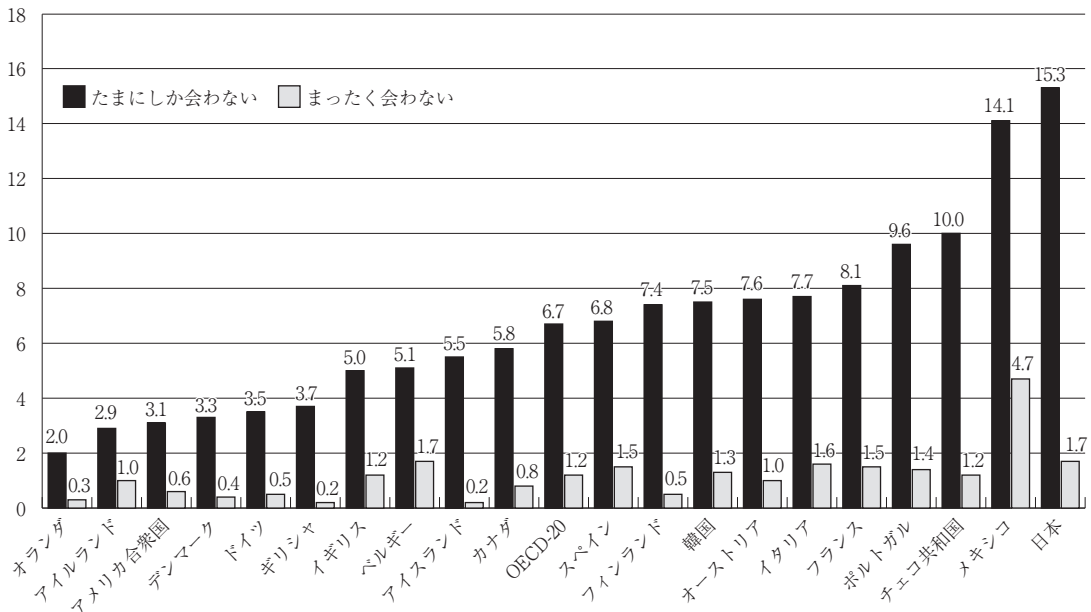
ここでいう「社会的孤立」とは、「家族以外」の他者とどれくらい交流や付き合いがあるかに関するもので、結果を見ると、先進諸国の中で日本が最も「社会的孤立度」が高い国になっている。

こうした主観的な領域に関する国際比較はそれ自体きわめて微妙な性格のものなので、この結果を額面通り受け止めることには慎重であるべきだが、日本が最も社会的孤立度が高い国ないし社会であるというのは、海外との比較に関する私自身の経験からしても十分にうなずけるものである。

例えば、東京など日本の大都市では(あるいは地方都市でも)、見知らぬ者同士が声をかけあったり、ちょっとしたコミュニケーションをとったりすることが本当に少ない。「無言社会」とも呼べる状況が支配的であり、このことは、日本で過ごしているとそれが当たり前になって気にとめることもなくなるのだが、海外の都市に比べてこれはかなり特異な状況と感じられる。

こうした点に関し、ここで注目してみたいのはこの調査結果での“国の並び”方である。つまり、ここで挙げられている国々を概観すると、ごく大づかみな把握として、“いわゆる個人主義的と呼ばれる傾向の強い国のほうが、概して社会的孤立度が低く、逆に家族主義的な傾向が強いとされる国のほうが、概して社会的孤立度が高い”という結果が示されているという点だ(前者の例としてオランダ、アメリカ、デンマーク等。後者の例としてメキシコ、ポルトガル、イタリア等)。

これは一見逆説的な現象のようにも見えるが、考えてみれば当然とも言える結果でもある。つまり「家族主義的」な傾向の強い国ないし社会——日本はその典型の一つだろう——においては、まさにそうであるがゆえに、家族あるいは集団の「ウチとソト」の境界が強くなり、したがって“家族や集団(の境界)を越えたつながり”が希薄になりがちなわけである。逆に「個人主義的」な傾向の強い国ないし社会のほうが、むしろ独立した個人と個人が集団を越えて(ゆるやかに)つながることが自然になされ、それが社会的孤立度の低



注:「たまにしか会わない」は、友人、同僚、知人と「たまにしか会わない」あるいは「まったく会わない」と回答した者の割合。
「まったく会わない」は、友人、同僚、知人と「まったく会わない」と回答した者の割合。
(出所) OECD(2005)

図1 先進諸国における社会的孤立の状況

さという結果として現れることになる。言い換えると、これまでさまざまな形で論じられてきた点でもあるが、日本の場合、“身内（ウチ）”に対する関係と“他人（ソト）”に対する関係のあり方の「落差」が際立っているのだ。つまり日本における人と人との関係のあり方の特徴として、「“身内”あるいは同じ集団に属する者の間では、過剰なほどの気遣いや同調性が強く支配するが、集団の『外』にいる人間に対しては、無視か、潜在的な敵対関係が一般的となる」ということが指摘できる（この点と「ケア」がどうかかわるかは後ほど論じる）。

この種の話題は各種の「日本人論」などの中で以前から論じられてきたテーマでもあり、例えば文化人類学者の中根千枝が、高度成長期にベストセラーとなった著書『タテ社会の人間関係』の中で、日本社会の特徴を「集団の孤立性」という点に集約させた議論が思い出される〔中根（1967）〕。現在の日本社会にもそのまま当てはまるような記述なので、中根の文章の一節を引用してみよう。

『ウチ』『ヨソ』の意識が強く、この感覚が先鋭化してくると、まるで『ウチ』の者以外は人間ではなくなってしまうと思われるほどの極端な人間関係のコントラストが、同じ社会にみられるようになる。知らない人だったら、つきとばして席を獲得したその同じ人が、親しい知人（特に職場で自分より上の）に対しては、自分がどんなに疲れていても席を譲るといったような滑稽な姿がみられるのである。実際、日本人は仲間といっしょにグループでいるとき、ほかの

人々に対して実に冷たい態度をとる〕〔中根（1967）〕。

このような点と、先ほど見た世界価値観調査に示される「社会的孤立」は、表裏のことと言えるだろう。

中根は「集団の孤立性」という表現を使っているが、（それと実質的には変わらないものだが）筆者自身は“集団が内側に向かって閉じる”という表現をコミュニティ論の文脈で使ってきた〔広井（2005, 2009）〕。この“集団が内側に向かって閉じる”というあり方（関係性）こそが、ある意味で日本社会の最大の特徴であり、ケア論とのかかわりにおいても克服すべき課題であると私は考えている。さらに言えば、近年の日本において「生きづらい」（社会）という言い方がされることがあるが、この「生きづらさ」のかなりの部分は、ルーツをたどればこのことに淵源していると思われる。

2 農村型コミュニティと都市型コミュニティ——関係性またはケアの進化

以上のような話題を少し大きな視点でとらえ返すと、それは「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」の対比として把握することも可能だろう〔広井（2009）〕。

ここで「農村型コミュニティ」とは、いわば“集団の中に個人が溶け込み、同質的な個人が情緒的な次元でつながるような関係性”であり、「都市型コミュニティ」とは“集団からある程度

表1 コミュニティの形成原理の二つのタイプ

	(A) 農村型コミュニティ	(B) 都市型コミュニティ
特質	“同心円を広げてつながる”	“独立した個人としてつながる”
内容	「共同体的な一体意識」	「個人をベースとする公共意識」
性格	情緒的（&非言語的）	規範的（&言語的）
関連事項	文化	文明
	「共同性」	「公共性」
	母性原理	父性原理
ソーシャル・キャピタル（注）	結合型（bonding） （集団の内部における同質的な結びつき）	橋渡し型（bridging） （異なる集団間の異質な人の結びつき）

（注）ここでの「結合型」と「橋渡し型」はソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の基本的な二類型である（パットナム（2006））。

独立した個人が、規範的な公共意識をベースにつながるような関係性”と呼べるものだ(表1参照)。

ここで注意したいのは、農村型コミュニティと都市型コミュニティはそれぞれ長所・短所を持っており、いずれか一方が正しいといった性格のものではなく、重要なのは両者のバランスであるという点である(なぜそう言えるかについては後段で論じる)。そして先ほどからの議論の流れで言うと、日本の場合、人と人との関係性は概して前者の「農村型コミュニティ」に傾斜しがちであり、それが「ウチとソトの落差」や社会的孤立度の高さといった点につながっているとと言えるだろう。

さらにもう一つ重要な点として、筆者はこれを「日本人の国民性」といった、不変の属性のようなものとして理解するのは間違っていると考えている。以前「関係性の進化」という言葉で論じたことだが〔広井(2006)等〕、「ウチとソトを強く区別する」「集団が内側に向かって閉じる」といった日本社会にありがちな行動パターンや関係性は、比喩的に言えば“稲作の遺伝子”と呼ぶべき背景、つまり2000年に及ぶ灌漑稲作社会の歴史において、比較的小規模の集団が、一定以上の強い同調性が求められる生産構造ないし社会構造において生産と生活を営む中で、それに「適応的」な行動様式として浸透してきたものとして把握できるだろう。⁵⁾

言い換えれば、人と人との関係性や行動パターン——最広義の「ケア」のあり方——というものは、固定的な「国民性」といったものがあるのではなく、その社会の風土的・環境的条件や歴史的状況に適応するように“進化”するのであり、現在の日本について言えば、そのような中で醸成されてきた人々の行動様式が、急速な都市化といった社会構造の変化にまだ追いついていないというだけのことなのである。

つまり戦後の日本社会は農村から都市への人口大移動の中で、都市の中に「カイシャ」,「核家族」という“都市の中のムラ社会(農村型コミュニ

ティ)を作り、ある時期まではそれが高い経済成長とも一体となって一定の好循環を生んできた。しかし近年ではそれが経済の成熟化やカイシャ、家族の流動化の中で機能不全に陥っており、それが上記のような「社会的孤立」や“無縁社会”といった状況として現れているのだ。

それは関係性ないし最広義の「ケア」にかかわる時代の大きな過渡期であるとともに、多くの人々が従来の関係性ではまずいということを感じ始め、いわゆるソーシャル・ビジネスやNPO等をめぐる動きなどを含めて、新たなつながりの形に向けての行動を起こし始めている時期と言える。こうした意味で、現在そしてこれからの数年～数十年の日本社会は、ゆるやかな、しかし巨大な「関係性の組みかえ」の時代でもあるだろう。

こうした点に関し、若干の希望をこめて記せば、ゼミの学生などを含めて近年の若い世代の行動様式を見るにつけ、先ほどから述べているような“見知らぬ他者とのコミュニケーション”や“集団のソトの者への配慮”といった点において、「都市型コミュニティ」的な関係性が——「カイシャ」「核家族」の求心性が(経済成長への上昇気流の中で)強固になった団塊世代などの人々の行動パターンに比べ——日本社会の中で徐々に芽を出し始めているのを筆者は感じてきた。

しかしながら他方で、ラインなどをめぐってのいじめやトラブルが深刻化していることにも示されているように、日本社会のもちやすいムラ社会性(農村型コミュニティ的性格)が、ネット上でむしろ増幅して現われ、“ネット・ムラ社会”とも呼ぶべき関係性や状況が生まれているのも確かなことである。

いま指摘した点は、近年の日本社会における「都市型コミュニティ」的な関係性の生成という方向と、ネットを舞台としてのムラ社会性ないし「農村型コミュニティ」的な関係性の増幅化という、関係性をめぐる二つの異なるベクトルということになるが、これらは今後どのように展開し、全体としていかなる像を結んでいくのだろうか。

⁵⁾ この点に関し村上(1998)参照。

そこで一つの焦点となってくるのが「ケアの倫理」を含む、関係性にかかわる倫理のありようである。

Ⅲ 2つのケア理解 ——個人からの出発／コミュニティからの出発

1 「ケアの倫理」とリベラリズム／コミュニティリアニズム

さて、「ケアの倫理」というテーマに関して広く知られているのは、アメリカの心理学者キャロル・ギリガンの「ケアの倫理」と「公正の倫理」の対比に関する議論である。

ギリガンは、近代ヨーロッパでの倫理をめぐる議論の文脈では「公正の倫理ethics of justice」とも呼ぶべき倫理観が基調をなし、そこでは正義、公正、原理・原則、普遍性といったことに基本的な価値が置かれたが、実は人間社会においては同時に「ケアの倫理ethics of care」と呼ぶべき倫理が本質的な意味をもち、それはむしろ個別の場面における他者への（状況依存的な）配慮や気遣い、共感といったことを中心とするもので、そうした“もうひとつの”倫理のあり方に注目することが重要との議論を展開したのである〔Gilligan (1982)〕。⁶⁾

本稿のここまでの議論を読まれた方にとっては、ここでギリガンが「ケアの倫理」と呼ぶものが、先の「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」との対比との関連で見れば、概して前者の関係性に呼応し、あるいはそれに親和的であることに気づかれるだろう（同様に「公正の倫理」

は「都市型コミュニティ」に呼応）。そしてまた、「個別の場面ごとの他者への配慮や気遣い」といった（ケアの倫理の）あり方は、これも先ほどの議論とのかかわりで見れば、ある意味でまさに“日本的”な関係性に親和的なものであるだろう。それは個別の「場の空気」に応じた状況倫理ないし関係性のあり方とも言えるものである。

しかしながら、筆者自身は「ケア（の倫理）」というものを単純に「公正（の倫理）」と対立的にとらえる、あるいは「農村型コミュニティ」にのみ対応するものとして狭くとらえる見方には、次のような意味で疑問をもっている。

それは、「ケア」という言葉ないし概念の定義の問題でもあるのだが、「ケア（の倫理）」には、「農村型コミュニティ」のみならず「都市型コミュニティ」につながる側面もあり、またその限りでは、むしろ「公正（の倫理）」を包含するような性格ももっていると考えられるからである。そしてこの論点は、別の文脈から言えば、いわゆる「リベラリズム」と「コミュニティリアニズム」の対比ないし対立ともつながっているととらえることができる。⁷⁾

議論が錯綜してきたので、こうした点を「リベラリズム的な『ケア』観」と「コミュニティリアニズム的な『ケア』観」の対比として整理してみよう。それを示したのが表2である。⁸⁾

表2は異なる位相の概念をいささか単純化して対比したものであり、また大きくは先の表1の「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」の対比に実質的に重なるものである。

そしてここで確認したいのは、先ほど少し指摘

⁶⁾ ギリガンの議論は、子どもの規範意識ないし道徳意識の発達に関する、よく知られたコールバーグの理論を意識したもので、そこでの西欧近代的あるいは男性主義的なバイアスを批判するという性格をもつものだった。ただし逆にまた、そうした男性－女性という対比それ自体が、倫理のありよう（ひいてはケアをめぐる役割分担）を性差によって固定的に区分してしまうという批判を受けうる内容となっている。こうした話題を幅広い視点から考察した論考として小林（2013）を参照。

⁷⁾ ここでの「リベラリズム」「コミュニティリアニズム」はアメリカを中心とする政治哲学ないし公共哲学の用語法によるもので、リベラリズムは個人の自由による基本的な価値を置き、またローレンスの理解ではそうした自由が各人に平等に保障されるための対応までも含意する（＝これによっていわゆるリバタリアニズムとは袂を分かつ）ものとなる一方、徳や善といった個人の内的な価値のあり方については立ち入らないものとする。これに対してコミュニティリアニズムは、個人よりも（あるいは個人と同等に）コミュニティ（ないし共同体）に一次的な価値を置くとともに、徳や善といった個人の内的な価値について積極的に語ることを肯定的にとらえる。こうしたテーマについて主題的に論じることが本稿の課題ではないが、これらの話題に関して菊地・小林編（2013）参照。

表2 二つの「ケア」理解——コミュニタリアニズム的な「ケア」観とリベラリズム的な「ケア」観

	コミュニタリアニズム的な「ケア」観	リベラリズム的な「ケア」観
基本的な出発点	コミュニティ	個人
重視する価値	関係性や利他性	個人の自由
ケアの性格	「善 (good)」としてのケア	「権利 (right)」としてのケア
時代性とのかかわり	伝統的な価値も重視 (含 伝統的家族、世代間継承性)	近代的価値
ケアに関するギリガンの議論との関係	ケアの倫理 (ethics of care)	公正の倫理 (ethics of justice)
コミュニティの性格	農村型コミュニティ	都市型コミュニティ
共同性／公共性	共同性	公共性

(注) ここでの「結合型」と「橋渡し型」はソーシャル・キャピタル (社会関係資本) の基本的な二類型である (パットナム (2006))。

したように、「ケアの倫理」は「公正の倫理」と単に対立するものとして位置づけられるべきではなく、むしろ表2の右側の系列、つまりリベラリズムや個人の自由、都市型コミュニティ、公共性等々といった理念をも含む、より包括的な概念としてとらえることが重要であるという点である。

その理由は以下のような点にある。第一に、先ほどの日本社会における「社会的孤立」の話ともつながるが、表2における左の系列のケア観のみでは、「ケア」の及ぶ領域は一步間違えれば家族ないし特定の集団の“内部”にのみとどまることになり、現在のような都市化された社会においては、それは結果として個々の家族や集団の“孤立”を招くことになりうるからである。

また第二に、介護保険などの社会的制度としての「ケア」においては、表2の右の系列のケア理解 (= 権利としてのケア) が重要になる。さらに第三に、介護や医療などの個別のケアの場面にそくして見ても、左の系列のケア理解のみでは、場合によってそれは、その“場の空気”に依存し、ある種の「上下 (ないし権力) 関係」が支配するような、抑圧的ないし閉鎖的な関係性に至るおそれもあるからである。

誤解のないよう急いで記すと、かといって私は表1におけるリベラリズム的なケア観のみが重要と考えているのではない。ケアについては表2の左側の系列の理解 (コミュニタリアニズム的な「ケア」観) も同時にまた本質的な意味をもつのであり、両者は補完的なものと考えべきで、二者択一ではない。実はこれは先ほど表1にそくして「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」の両者が人間にとっていずれも本質的であると論じたことと重なることである。

2 人間における「関係の二重性」

ではそもそもなぜ両者は補完的と言えるのか。あるいは人間にとって両者 (コミュニタリアニズム的なケア理解とリベラリズム的なケア理解、農村型コミュニティと都市型コミュニティ) がいずれも重要と言えるのか。

この話題は以前の拙著で主題的に論じた点であるので簡潔に記すにとどめたいが〔広井 (2009) 参照〕、それは以下のような意味での、人間という存在にとっての「関係の二重性」に行き着くものと私は考えている。

ここで手がかりとしてみたいのは、生態学者の

⁸⁾ 先の注でも指摘したように、ここでの「リベラリズム」の用語法はアメリカ特有の文脈のもので、ヨーロッパの政治哲学 (あるいはエスピン＝アンデルセンなどのいわゆる比較福祉国家論) ではその含意は大きく異なることに留意する必要がある。すなわち、ヨーロッパ的な文脈での「自由主義liberalism」は、いわば本来の意味の自由主義であり、政府の介入をミニマムなものとしてできる限り市場に委ねるという考え方で、アメリカでのリバタリアニズムにむしろ近い (逆にアメリカでのリベラリズムは、ヨーロッパにおける社会民主主義の発想に近いものとなる)。これらの結果、アメリカ的な用語法での「リベラリズム－コミュニタリアニズム－リバタリアニズム」はヨーロッパの政治哲学ないし比較福祉国家論での「社会民主主義－保守主義－自由主義」という区分とそれぞれおおむね対応する関係にあることになる。この話題については広井 (2003) 参照。

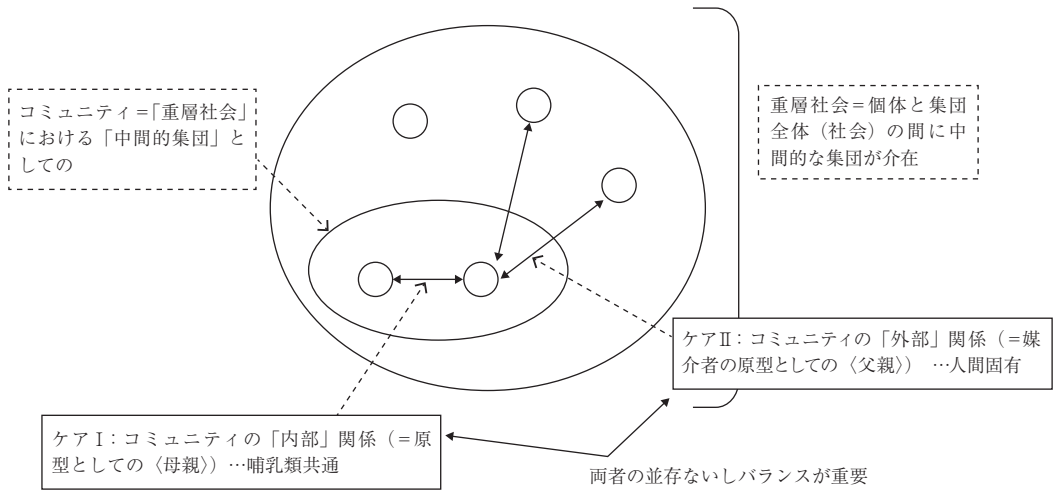


図2 ケア／コミュニティをめぐる構造

河合雅雄が行っている次のような議論である〔河合（1990）〕。

すなわち河合は一方で、①「家族という社会的単位の創出」こそが、サルからヒトへの進化の決定的な要素であるという議論を展開する。河合はこの点に関して、「サル社会には、父親は存在しない。父親というのは、家族という社会的単位ができる、つまり、ヒトが誕生したと同時に生成した社会的存在である」と述べている。つまり母親が子どもの世話をするという関係は、既に哺乳類一般において成立しているが、それにとどまらず、父親が子育てにかかわるという点、ないしその意味での「家族」という“社会的”単位の成立が、人間にとって本質的であったという議論である。

他方で河合は、②人間という生き物の特徴は「重層社会」をつくることにある、という興味深い議論を行っている。ここでは「重層」という点がポイントで、それは人が家族組織の上にさらに村を作るように「重層」の構造をもった社会をいう。つまり、個人ないし個体がダイレクトに集団全体

（あるいは社会）につながるのではなく、その間にもう一つ中間的な集団が存在するという点であり、こうした重層社会は人間において初めて成立する。

以上、河合が行っている議論（①家族という社会的単位の創出、②重層社会）を確認したが、この①と②は、同じ構造を別の表現で表しているものだろう。

すなわち先ほど確認したように、人間の社会は最初から個体ないし個人が「社会（集団全体）」に結びつくのではなく、その間に中間的な集団をもつ。したがって、個体の側から見れば、それはその中間的な集団「内部」の関係と、「外部」の社会との関係という、二つの異なる関係性をもつ（＝関係の二重性）。⁹⁾

個体ないし個人と社会との間に存在する、ここでの“中間的な集団”は、先ほども述べたように原型的には家族という存在であるが、より一般的には「コミュニティ」というものと重なっているだろう。こうした点を単純化して示したのが図2

⁹⁾ おそらく前者（＝内部関係）の原型が〈母親〉との関係であり（これは哺乳類に共通する）、後者（＝外部関係）の原型、言い換えれば個体を「外」の社会に「つなぐ」存在の原型が〈父親〉であるだろう（ここで〈母親〉〈父親〉という括弧付きの表現をしたのは、いわばこれは原型のない象徴的な意味であり、現実の社会においては、それは通常の意味での父親や母親に必ずしも限定されず、さまざまな存在がその役割を担うことがありうるからである）。

である。

そして以上の「関係の二重性」という点は、ほかでもなく人間にとっての「ケア」の二重性を示していると言い換えられるだろう。

つまり、一般的にはケアという概念やそのイメージに近いのは、前者（母子関係をひとつの原型とする、コミュニティの内部関係）であろう。しかしながら、これは最終的には「ケア」の定義の問題だが、先ほど「ケアの倫理」を「公正の倫理」との対立物として狭くとらえることに疑義を呈したように、人間にとってのケアはそうした関係性にとどまるものではなく、後者（コミュニティの外部関係、あるいは集団の外へ個としてつながっていく関係性）もまた人間にとって固有の「ケア」のあり方なのである。

人間にとってはこの（互いに異質な）二つの関係性ないし「ケア」がいずれも本質的と考えられるのであり、この点が、先ほど論じた「農村型コミュニティと都市型コミュニティ」、「コミュニティリアニズム的なケア理解とリベラリズム的なケア理解」の相互補完性の原理的な根拠になるのではないだろうか。

3 「ケアの科学」の可能性——近年の諸科学における「関係性」への注目

先ほどから、「農村型コミュニティと都市型コミュニティ」、「コミュニティリアニズム的なケア理解とリベラリズム的なケア理解」の相互補完性ということ述べているが、このことは、近年の科学の諸領域における以下のような変容とも関係している。

すなわちそれは、「個人」あるいは個体というもの単に独立した存在としてとらえず、他者との相互作用を含む社会的な関係性の中でとらえたり、あるいは他者との協調行動や共感、利他的行動といったものに焦点をあてるような研究が、近年、文・理を含むさまざまな学問分野で「百花繚乱」のように生成し発展しているという点である。

あらためて確認すると、17世紀のいわゆる「科学革命」を契機に生成・発展した近代科学（ない

し西欧近代科学）の基本的な枠組みでは、人間の個体あるいは個人は、それぞれが自己完結的に存在するような独立した存在と了解された。また、かりにそうした個体ないし個人が相互に交渉したりかかわりをもったりする場合でも、あくまで一次的に存在するのはそのような独立した個体であると前提されてきたのである。

ところが上記のように、近年に至り、そうした「個体／個人」中心の近代科学的なパラダイムに根本的な疑義を投げかける議論がさまざまな学問分野において“同時多発的”に生じている。

例えば、人間の健康や病気というものを基本的に「個体」に完結したものとみなし、身体内部の物理化学的因果関係によって病気のメカニズムが説明されると考えるのが近代科学ないし近代医学の枠組みだった。これに対し、「健康の社会的決定要因（social determinants of health）」に注目し、他者とのかかわり、コミュニティとのつながり、経済格差といった（個体を超えた）要因が、人間の健康あるいはさまざまな病気の生成において決定的な影響を与えていることを実証的に明らかにする「社会疫学（social epidemiology）」と呼ばれる分野が発展している〔ウィルキンソン（2009）、近藤（2005）等〕。これは、上記のような近代科学・医学の枠組みに基本的な修正を要請するものであり、個人と個人の「関係性」あるいは「ケア」関係を、人間にとっての本質的な要素としてとらえる内容となっている。

また、こうした社会疫学の展開以外でも、例えば、

(a) 他者との相互作用や社会的な関係性が進化の過程における人間の脳の形成にとって本質的な意味をもったとする「ソーシャル・ブレイン」と呼ばれる把握〔藤井（2009）〕や、「ミラーニューロン」（他者の痛みを自己の痛みとして認識するような機構）にかかわるニューロン等に関する研究）などに見られるような脳研究の展開

(b) 人と人との信頼やコミュニティないし関係性の質に関するいわゆる「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」論

(c) 人間の利他的行動や協調行動に関する進化生物学的研究

(d) 経済学と心理学ないし脳研究が結びついたいわゆる行動経済学ないし神経経済学の一部（この中には、愛情に関する脳内化学物質とされるオキシトシンについての神経経済学者ポール・ザックの研究なども含まれる）

(e) 経済発展との関係を含む、人間の幸福感やその規定要因に関する「幸福研究」

等々の展開が見られる〔これらにつきドゥ・ヴァール (2010)、ガザニガ (2010)、パトナム (2006)、内田 (2007)、友野 (2006)、Bowles and Gintis (2011) 参照〕。

これらはいずれも、個人ないし個体間の「関係性」や協調行動、利他性等に注目する内容のものであり、そのまま「ケア」にかかわると同時に、上記のように近代科学のパラダイムないし近代的な人間理解とは異質な要素を含む、科学の新たな方向性を示すものととらえることもできるだろう。¹⁰⁾

つまりあくまで「個人」ないし「個体」中心のモデルから出発してきた近代科学が、その発展の極において、むしろそれとは異質のベクトルである「関係性」という基本概念に至ろうとしているわけで、それはいわば近代的なパラダイム内部からのある種の“反転”であり、そのことは結果として、先の表1および表2における左と右の境界を連続的なものにするようになる。

言い換えればそれは、先に論じたような「コミュニティアニズム的なケア理解とリベラリズム的なケア理解」ないし「農村型コミュニティと都市型コミュニティ」の相互補完性という点とつながり、あるいはそこでの二者択一的な対立を乗り越えるような方向をもつものと考えられる。

IV ケアの経済的評価——ケア・時間・市場経済

1 「市場の失敗」とケア

「ケアの倫理」をめぐって若干の原理的な考察を行ってきたが、以上の議論も踏まえつつ、ここで視点をやや現実的な場面に移し、「ケアの経済的評価」というテーマを少し新しい角度から考えてみたい。

既にさまざまに論じられているように、介護職などケアに関する仕事の多くは他分野に比べて賃金が概して低く、またそのこともあって離職率が相対的に高いという事実がある。ここで課題となるのは「ケアの経済的評価」というテーマだが、これについて私は次のような新たな把握が重要ではないかと考えている。

それはまず「市場の失敗」という概念にかかわるものである。あらためて確認すると、経済学に「市場の失敗」という基本コンセプトがあり、それは効率性（ないし効率的な資源配分）は「市場」においてこそ実現できるが、しかし市場が十全に機能するためには一定の条件が必要であり、そうした条件が満たされない場合には市場は効率性を実現できない、すなわち「失敗」という考え方である。

こうした市場の失敗に関して、実は市場というものは「情報の完全性」というものを前提としており、しかし実際にはこの条件は満たされないことが多いので（情報の不完全性ないし非対称性）、情報をめぐっての「市場の失敗」がさまざまな形で生じているという議論を提起したのがアカロフやスティグリッツといった経済学者であった（彼らはそうした“情報の経済学”に関する貢献で2001年のノーベル経済学賞を受賞している）。

以上を別の観点から言えば、「情報」というコンセプトを経済学に導入することによって、いわば「市場の失敗」の範囲が広がったのであり、言い換えれば“市場が万全でないこと”が従来考えられてきたよりも広いことが認識されるようになった

¹⁰⁾ そもそもなぜこうした「関係性」への注目が異なる科学の領域において生成、展開しているかという点については広井 (2015) 参照。

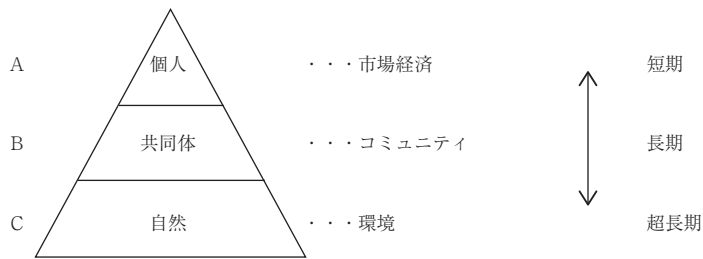


図3 市場経済－コミュニティ－環境（自然）の関係

ことになる。

情報をめぐる市場の失敗について述べたが、ここで私が論じたい点はその先にある。

それは端的に言えば、「情報」というコンセプトの先に、「時間」という概念を市場というものの理解に導入すべきであり、言い換えれば、市場経済においては、いわば“時間をめぐる「市場の失敗」”がさまざまな形で生じているという把握が重要ではないかということだ。

これは取り立てて難しいことを言っているのではなく、内容はごくシンプルである。すなわち市場というものは、きわめて“短期”の時間軸で物事を評価するので——金融市場などはその典型である——、より長い時間軸で評価されるべき財やサービスは、十分にその価値が評価されず低い価格づけとなったり、消し尽されたりすることである。

いま「より長い時間軸で評価されるべき財やサービス」といったのは、例えば農林水産物や森林など自然環境の価値に関するものであり、そしてまた、次に述べるような理由で介護など「ケア」のサービスもそれに該当すると考えられる。

こうした点を、少し整理して示すと図3のようになる。

2 ケア・農業・文化

図3は「個人－共同体－自然」の関係を示したもので、それを「市場経済－コミュニティ－環境」と対応させた内容となっている。

この中で、ピラミッドの上層の「市場経済」においては上記のように時間軸の射程が短く、比

的に言えば時間が最も“速く流れる”。しかし個人と市場経済の土台にある共同体ないしコミュニティの次元では、世代間の継承性ということを含めて時間軸の射程はもっと長く、さらに自然の次元ではそれはさらに長くなる。そこでは時間は“ゆっくりと流れる”。

例えば介護について見ると、もともと介護という営みは、親の介護を子が行い、その子が年をとったらまたその子が介護を行い・・・という具合に、世代間の継承性の中でのコミュニティ（相互扶助）的な営みとして行われていた（図のピラミッドの中層に該当）。しかしそれが市場において「介護サービス」という商品になると、そうした要素は捨象され、個々の行為を短い時間軸の中で、いわば断片化する形で評価することになるので、その「価格」はそれだけ低くなってしまわないだろうか。

先ほど言及した、介護などのケア労働が市場においては十分に高く評価されず、離職者も多いという事実は、根本的にはこうした構造に由来すると考えられるのではないか。

そして、そうであるがゆえにこれらの領域においては公的な枠組み（公的介護保険など）においてその価格を市場より高めに（本来の価値が評価されるよう）設定し、つまり公的なプライシング（価格づけ）を通じて“時間をめぐる市場の失敗”を是正する必要があるのではないか。

さらにこのような発想で考えていくと、一見何のつながりもないような、農業などの分野と介護ないしケア関連分野の意外な共通性が見えてくる。

つまり農業などの分野でも、相当な労働を行って作った農産物が低い価格でしか評価されず、十分な収入が得られないという理由で離農したりする者が（若い世代を含めて）後を絶たない。これは先ほどのピラミッドでは、最も土台にある「自然」の領域にかかわるもので、やはりその価値は市場経済においては十分されず、従事者が減少していくわけだが、その構造は先ほどの介護などと共通している。

興味深いことに、実は「介護（ないしケア）」と「農業」とは語源的にも同様のルーツをもっている。つまり「農業」は英語でagricultureで、これはcultivate（耕す）と関連しているが、この語源もまたラテン語の動詞のコレール（colere）である〔伊東（1985）参照〕。その原義は「世話をする」であり、本稿の初めでふれたように、奇しくも「ケア」という言葉もこのコレールに由来している。つまり“自然の世話をする”のが農業，“人の世話をする”のがケアあるいは介護ということになる（さらにもう一つこれらに関連しているのが「文化」である）。¹¹⁾

議論をもとに戻すと、このようにコミュニティや自然にかかわる領域において、“時間をめぐる「市場の失敗」”が生じているのであり、上記のように、それらは公共政策を通じて是正される必要がある（公的プライシング、各種補助金等）。

介護以外の例では、2012年から自然エネルギーに関する固定価格買取制度という制度が（ドイツ等にならって）日本でも導入されたが、こうした制度は、「自然」に関する価値が低く評価されがちであるのを、公的な価格づけを通じて是正し、それによって自然エネルギーの普及を促す仕組みとして把握することができるだろう。ヨーロッパにおいて広く農業に関する公的支援策が行われているのも同様の視点で理解することができるし、文化の支援のための公的な「文化政策」が活発

に進められていることも同様である。

3 「生産性」概念の見直しとケア

以上の議論とも関連するテーマとして、現代社会あるいは経済の成熟化の時代における「ケア」のもつ意味に関して、環境政策などの分野で議論される「労働生産性から環境効率性へのシフト」という話題とケアとのかかわりについて述べておきたい。

「労働生産性から環境効率性へのシフト」とは次のような趣旨である。かつての時代、とりわけ高度成長期を中心とする経済の拡大・成長の時代においては「人手（労働力）が不足し、自然資源は十分にある」という状況だったので、“できる限り少ない労働力で多くの生産を上げる”こと、つまり「労働生産性」が何より重要とされた。

しかし現在では状況は大きく変わり、日本を含む先進諸国において高い失業率が慢性化しているように、むしろ「労働力が余り、自然資源が足りない」という（従来とは）逆の事態となっている。こうした時代には、むしろ「人」を多く活用し、逆に自然資源を節約することが課題となり、したがって生産性の概念を「労働生産性」から「環境効率性（ないし資源生産性）」へシフトしていくこと（＝人はむしろ積極的に活用しつつ、できる限り少ない自然資源や環境負荷で生産を行うこと）が本質的な重要性をもつ。

いわば“生産性のモノサシを変える”ということであり、そうなると、これまで“生産性が低い”ことの典型とされてきた介護や福祉、教育などの分野、つまり「ケア」にかかわる分野に全く新しい意義が生まれることになる。つまり、ケアという「労働集約的」な分野に資源配分をしていくことこそが、（雇用創出ないし失業率改善といった意味で）「経済」にとってもプラスになるという理解である。「ケア」分野に積極的な投資あるいは

¹¹⁾ 文化cultureという言葉は先ほどの農業の「アグリカルチャー」と関係している。つまりどちらも“耕す”あるいは上記の「世話をする」ということと重なっているものであり、このように、興味深いことに「農業」「ケア」「文化」はいずれも“世話をする”ないし“耕す”という同じ語源から由来している。以上をまとめると、「自然の世話をする→農業」、「人の世話をする→ケアまたは介護」、「心の世話をする（“心を耕す”）→文化」ということになるだろう。

資源配分を行っている北欧などの国が、経済においても一定以上の良好なパフォーマンスを示しているのはこうした点とも関連があると思われる。

4 「環境福祉税」の可能性——ケア・労働・自然

いま「労働生産性から環境効率性へ」という方向について指摘したが、しかし放っておくだけではそうした転換はなかなか進まないの、経済的なインセンティブとともにそのような方向に企業の行動を誘導していくことがポイントとなる。そのための政策として、90年代頃からヨーロッパにおいて「労働への課税から資源消費・環境負荷への課税へ」という政策が採られるようになった。

この象徴的な例が、ドイツで1999年に行われた「エコロジー税制改革」と呼ばれる改革である。具体的には、環境税を導入するとともにその税収を年金にあて、そのぶん社会保険料を引き下げるといった内容の改革である。その根底にある理念は、上記の「労働への課税から資源消費・環境負荷への課税へ」というものであり、それを通じて“人を積極的に使い、資源消費・環境負荷を抑える”という方向への企業行動の転換ひいては生産性概念の転換を促進するというのがねらいであった。こうした発想を踏まえて、日本ではあまり知られていないが、環境税を導入しているヨーロッパの国々の多くは、意外にも環境税の税収の相当部分を社会保障に使っているのである〔広井(2001)〕。

先ほどの「ケア労働の経済評価」の話題ともつながるが、こうした発想の延長で、筆者としては「環境福祉税」とも呼ぶべき政策を提案したい。具体的には、環境税（ガソリン税の再編を含む）を導入するとともにその税収の一部を介護の財源にあて、環境負荷の抑制と介護サービスの充実を統合的に実現するという政策である。これにより、先ほど議論したように介護（ケア）労働の価値が市場においては十分に評価されにくいのを公的な価格設定で是正し、その適正な評価を図ることになる。同時にそれは、ここで論じている「労働への課税から資源消費・環境負荷への課税へ」

のシフトとしての意味をもち、これを通じて「労働生産性から環境効率性へ」という方向を誘導することになる。

上記のドイツのエコロジー税制改革の場合は環境税収を年金に充当しているが、介護に充てるといった例はまだ存在しない。このような政策は、高齢化のフロントランナーでありかつ人口減少社会に最も早く移行した日本が、世界に発信しうるといったような政策展開になりうるとと思われる。

5 「ケアの6次産業化」とコミュニティ経済

以上のような議論や考察から浮かび上がってくるのは、図3の内容とも関連するが、「ケア」という営みを、「ケアする者－ケアされる者」といった1対1の関係性の中に完結させず、あるいは一部の専門職のみが関与する閉じた領域としてとらえず、それをコミュニティや自然とのかかわりを含めた大きな視座の中でとらえていくという方向である。なおこの場合の「コミュニティ」には、介護などのケアがそこに含まれていたような、世代間の承継性や相互扶助が本質的なものとして含まれている。

こうしたあり方に関連する最近の興味深い事例の一つとして、千葉県香取市の「恋する豚研究所」の試みを紹介してみたい。

「恋する豚研究所」とは、養豚場で豚を飼育するとともに、その加工や流通、販売なども一括して行い、かつその加工などの作業を知的障害者が行うという福祉的な機能ももった事業を行っているところで、“福祉（ケア）と農業とアート”を組み合わせた試みと呼べるものである（ちなみに奇しくもこの3者は、先ほど述べたようにいずれも語源的に「ケア」とつながっている）。「アート」という点は、流通や販売にあたってクリエイターの人々が積極的に参加し、デザイン性ないし付加価値の高い商品を手がけていることを指している。また、福祉的な性格をもっていることは商品の流通や販売においては前面に出しておらず、あくまでその質とおいしさで勝負している。

興味深いのは、この事業を中心になって進めている飯田大輔さん（36歳）が、この事業の全体を

「ケアの6次産業化」というコンセプトで把握しているという点だ。農業の6次産業化ということはよく言われるわけだが、この事業の場合、「ケア」——本稿の初めで述べたように、介護という意味のみならず広く“世話をする”といった意味を含む——を軸にして、生産・加工・流通・販売をつなぎ、それを事業化しているわけである。しかも養豚のみならず、ハムなどを作る時に使う塩なども地元産にこだわっており（ちなみに千葉県は豚の飼養頭数が全国3位）、経済の地域内循環ということを意識した事業にもなっている。

こうした例に示されるように、「ケア」という営みをそれだけで孤立させてとらえるのではなく、それを土台にある「コミュニティ」そして「自然」（ないし環境）にいわば“埋め込み”返しつつ、そのことを通じて地域におけるヒト・モノ・カネの経済循環の中に「ケア」を位置づけ、相互の活性化を図っていくという方向が、今後の大きな課題ではないだろうか。

さらにそれは、先ほどの“時間をめぐる「市場の失敗」”の是正というテーマとも合わせて考えると、「ケアを含むローカルな経済の地域内循環から出発しつつ、ローカル→ナショナル→グローバルという積み上げ——グローバルから出発するのではなく——の中で重層的な再分配のシステムを織り込み、『持続可能な福祉社会』と呼ぶべき社会を構築していく」といった、新たな社会構想につながっていくことになる。¹²⁾

そうした包括的な視野の中で「ケア」をとらえていく試みがいま何より求められているのではないだろうか。

参考文献

- リーアン・アイスラー（中小路訳、2009）『ゼロから考える経済学』、英治出版。
 伊東俊太郎（1985）『比較文明』、東京大学出版会。
 リチャード・G・ウィルキンソン（池本他訳）（2009）『格差社会の衝撃』、書籍工房早山。

- 上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也編（2008）『ケア その思想と実践』（全5巻）、岩波書店。
 内田亮子（2007）『人類はどのように進化したか』、勁草書房。
 大熊由紀子（1990）『「寝たきり老人」のいる国いない国』、ぶどう社。
 岡本祐三（1990）『デンマークに学ぶ豊かな老後』、朝日新聞社。
 マイケル・S・ガザニガ（柴田訳、2010）『人間らしさとは何か？』、インターシフト。
 柏木哲夫（1978）『死にゆく人々のケア』、医学書院。
 河合雅雄（1990）『子どもと自然』、岩波新書。
 菊地理夫・小林正弥編（2013）『コミュニティアニズムの世界』、勁草書房。
 川本隆史（1993）「介護・世話・配慮」、『現代思想』11月号、pp.152-162。
 小林正弥（2013）「「ケアと正義」の公共哲学」、広井良典編著『ケアとは何だろうか』（講座ケア 新たな人間—社会像に向けて 1）』、ミネルヴァ書房、pp.52-80。
 近藤克則（2006）『健康格差社会』医学書院。
 フランス・ドゥ・ヴァール（柴田訳、2010）『共感の時代へ』、紀伊国屋書店。
 友野典男（2006）『行動経済学』、光文社新書。
 中根千枝（1967）『タテ社会の人間関係』、講談社現代新書。
 テツオ・ナジタ（五十嵐監訳、2015）『相互扶助の経済』、みすず書房。
 ロバート・パットナム（柴内訳）（2006）『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』、柏書房。
 広井良典（1997）『ケアを問いなおす——〈深層の時間〉と高齢化社会』、ちくま新書。
 ———（1999）『日本の社会保障』、岩波新書。
 ———（2000）『ケア学』医学書院。
 ———（2003）『生命の政治学——福祉国家・エコロジー・生命倫理』、岩波書店。
 ———（2005）『ケアのゆくえ 科学のゆくえ』、岩波書店。
 ———（2006）『持続可能な福祉社会』、ちくま新書。
 ———（2009）『コミュニティを問いなおす』、ちくま新書。
 ———（2011）『創造的福祉社会——「成長」後の社会構想と人間・地域・価値』、ちくま新書。
 ———（2013a）『人口減少社会という希望——コミュニティ経済の展開と地球倫理』、朝日選書。
 ———（2013b）「序章 いまケアを考えることの意味」、広井編『ケアとは何だろうか（講座ケア 新たな

¹²⁾「相互扶助」と経済とのかかわり、あるいは相互扶助を内部に組み込みそれと融合するような経済のあり方というテーマを、日本を素材として考察した示唆に富む著作として、ナジタ（2015）参照。ケアとの関連で言えば、この「相互扶助の経済」というコンセプトはアイスラーのいう「ケア経済caring economy」にもつながるだろう（アイスラー（2009））。また「コミュニティ経済」について広井（2013a）、同（2015）参照。

- な人間－社会像に向けて 1)』, ミネルヴァ書房, pp.1-30。
- (2015) 『ポスト資本主義 科学・人間・社会の未来』, 岩波新書。
- 藤井直敬 (2009) 『つながる脳』 NTT出版。
- 村上泰亮 (1998) 『文明の多系史観』, 中央公論新社。
- メイヤロフ (田村・向野訳) (1987) 『ケアの本質』, ゆみる出版。
- 山野和則 (1991) 『体験ルポ 世界の高齢者福祉』, 岩波新書。
- OECD (2005) 『世界の社会政策の動向』, 明石書店。
- Bowles, Samuel and Gintis, Herbert (2011), *A Cooperative Species*, Princeton University Press.
- Carol Gilligan (1982), *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press.

(ひろい・よしのり)

Ethics of Care and Public Policy

Yoshinori HIROI*

Abstract

The Concept of “Care” has wide-ranging meanings. In this article, how this concept has been discussed in the last decades in Japan is broadly reviewed first. Then a perspective is presented regarding the ethics of care, paying attention to the situation of ‘social isolation’ in the current Japanese society and the characteristics of its human relationship. And the two contrasting views about the meaning of care are examined drawing on the discussion by Carol Gilligan and the different political philosophies of liberalism and communitarianism. Lastly, based upon these arguments and from the viewpoint of ‘economic evaluations of care,’ the relationship between care and market economy and the reexamination of the concept of productivity are discussed, and the relevant public policy is presented having the comprehensive understandings of care, community and nature in perspective.

Keywords : ethics of care, social isolation, political philosophy, economic evaluation of care, community and nature

* Professor, Kyoto University